

アンソニー・トロロープ作『今の生き方』第八十三章 再び議場に現れたメルモット（翻訳）

木下善貞

（本稿はアンソニー・トロロープの『今の生き方』（*The Way We Live Now*, 1874-5）第八十三章の全訳である。翻訳に当たっては、Francis O'Gorman 編の *The Oxford World's Classics* 版の Sir Frank Kermode 編による Penguin Books 版を参照した。）

その木曜の午後、メルモットの事業の全体に総崩れがありそうだといたるところで噂されていた。コーエンループが逐電すると、まもなく誰もそのことを疑わなかった。大晩餐会に出席しなかったシテイの財界人たちは、自分たちの先見の明を自慢した。疑惑の金融業者のテーブルに着いて中国皇帝に会うことを拒んだ政治家たちも同じだった。グローヴナー・スクエアの屋敷に皇帝を受け入れたとき、晩餐会を準備し、手足となって働いた人々や、ウエストミンスター選挙区にメルモットを推薦し、彼のために選挙を戦った人々も、激しい攻撃から身を守らなければならぬことに気がついた。メルモットについて好意的なことを言う人、彼の罪について疑念を抱く人は一人もいなかった。グレンドール父子は完全にロンドンから退いて、もはや噂さえ聞かれなくなった。ロード・アルフレッドは晩餐会の日以来姿を見せていなかった。オルバリー公爵夫人も、世間の噂によると、メルモットの事業の総崩れによって黙らせられて、例年よりも数週間早く田舎に帰った。しかし、私たちが今たどり着いた時点ではまだこの帰郷はなされていなかった。

議長がちょうど四時に議場で席に着いたとき、多くの議員がすでに出席していた。メルモットとその失敗のせいで、議場にはいつも以上に活気づいた雰囲気が行き渡っていた。ロングスタッフ氏からピッカリングを購入した件に関連して、メルモットが文書偽造の罪で裁判にかけられることが、午前中自信満々に主張されていた。この日メルモットがまだどこにも姿を現していないことも知られていた。人々は彼がブルートン・ストリートのロングスタッフ屋敷にまだ住んでいることを知らないまま、グロウヴナー・スクエアの屋敷を見に出かけて、破産と犯罪の荒唐がすでにそこにはつきり見られるという印象をえて帰って来た。「彼がどこにいるか知りたいですね」と、ラプトン氏は議事室の会見室でピーチャム・ボークラーク氏に言った。

「彼は一日シテイに現れなかったそうです。ロングスタッフ屋敷にいますね。哀れなあいつは四面楚歌です。あいつは田舎に土地を持ち、ロンドンに屋敷を持っています。ほら、ニダーデイルがやって来ました。卿がこういう状況をどう思っているか知りたいです」

「ひどい状況ですね？」とニダーデイル。

「あなたについては、もっと悪くなるかもしれませんよ」と、ラプトン氏は答えた。

「そうですね。ですが、いいですか、ラプトン。私はまだ必ずしも全体を把握しているわけではないんです。私たちの弁護士は確かに金はあると三日前に言っていました」

「コーエンループは確かに三日前にここにいました」とラプトンは言った。「しかし、今はもういません。総崩れはあなたの名誉を守るため、ちょうど間に合うように起こったように私には思えます」ニダーデイル卿はかぶりを振ると、重々しい表情を作ろうとした。

「ほらブラウンが来た」と、サー・オーランド・ドラウトは言うのと、この財界紳士に急いで近づいて行った。メルモット氏が前回議場で金融について過ちを正そうとした相手だ。「メルモットがどこにいるか彼が教えてくれ

る。メルモットはコーエンループを追って大陸に向かったという噂が、いいかい、一時間前にあったんだ」しかし、ブラウン氏は頭を横に振った。彼は何も知らなかった。それでも、あすの今ごろまでには、警察がメルモット氏について知らなければならないことをみな知っているという強い意見を持っていた。ブラウン氏は議場で攻撃されたあの記憶に残る一件以来、メルモットに対して非常に手厳しかった。

大臣たちさえ、いつものようにその日の質問者から苦しめられるため座っているとき、もっぱら答弁によりもメルモット事件のほうに心を奪われていた。「君はあの件について何か知っているかね？」と、大蔵大臣が内務大臣に聞いた。

「彼の逮捕状はまだ出されていないと承知しています。彼は文書偽造の罪を犯したというのが一般的な意見ですが、それに伴う証拠があるとは思いません」

「彼は破産者だと思っね」と大蔵大臣。

「もともと彼が金持ちだったかどうか疑わしいです。ですが、じつを言いますと、——これまでに現れた最大の悪党です。彼はこの十二か月に個人の支出として十萬ポンド以上を使ったに違いありません。皇帝が事実を知ったとき、どう思うか知りたいたです」内務大臣の近くに座っていた別の大臣は、そんなことを中国皇帝は私たちの首相の半分も気にしないとと思った。

この瞬間、議場全体にほとんど耳に聞こえそうな沈黙が訪れた。大勢の人々が声を押し殺し続けるうなりの感覚を知っている人は、声を完全に止めることで引き起こされる感覚が耳にいかにも明瞭であるかも知っている。みな顔あげたが、完全な沈黙のなかで顔をあげた。ある連隊の軍服の色の変更に関して憤った質問者に答弁するため、次官が立ちあがったところだった。しかし、次官はかなり受けが期待できる巧妙な答弁を用意していた。こんな幸運が下つ端の手にゆだねられることは滅多になかったから、次官は答弁に専心していた。けれども、その次官さえ

びつくりして、しつかり覚えていた聞かせどころを一瞬忘れてしまった。ウエストミンスター選出議員、オーガスタス・メルモットが議場の中央を近づいて来たのだ。

メルモットはこのころまでに帽子をどう扱ったらいいか——いつかぶり、いつ取るか——や、どう席に着いたらいいか、知るくらいに議場のしきたりを学んでいた。議長の前面のドアから入って来たとき、彼は習慣から帽子を少し斜めにかぶっていた。おもに存在感を高めるという確信から採用したこの習慣のせいで、外見にぶんぶん傲慢さを漂わせていた。この瞬間、彼は歩き振りや顔の表情にみなが予想している——とよく知っている——あの破産のしるしを表すまいと、いつも以上に意を決していた。それゆえ、帽子をおそらくいつも以上に傾け、上着の襟をいつも以上に広げ、シャツにつけた大きな宝石ボタンを見せつけた。口と顎には特別傲慢さをみなぎらせていた。彼は一頭立て四輪箱馬車でやって来て、ウエストミンスター・ホールまで歩き、議員専用ドアから議事堂に入った。それから、大会見室を通り抜け、門衛のあいだを歩いて来た。——誰からも一言も話しかけられなかった。もちろん知っている人たちにたくさん会った。ほんとうは会った人たちをほとんどみな知っていた。——しかし、この日の冒険の始めから、人々から白眼視されることを予想し、冷たい表情やもつと冷たい沈黙に気づかない振りで耐えようと覚悟していた。こんな課題に対処して構えを整え、それを今実行していた。たんに破産のしるしを察知されることなく人々のあいだを動かさなければならぬだけでなく、そんな苦境のなかでまるまる一晩をすごすことにも耐えなければならぬ。しかし、彼は意を決しており、今それを実行していた。いつも以上に注意深く帽子を高く掲げ、いつも以上に丁寧に議長にお辞儀をした。野党の三列目のベンチにいつものように座ったとはいえ、いつも以上に活発に手足を振り出した。大男で、いつも効果的な振る舞いをしようと努めていたから、習慣的に動作で目立ってしまった。今もいつものようにはっきりと手足を動かしたいと願った。が、当然やりすぎてしまった。目撃していた人々は、議場を歩いたあと着席する彼の態度が特別無礼だと思った。次官は立ちあがっていたが、ほとん

ど啞然としてしまい、軍服の色についてのおいしい機知をまったく披露しないまま終わった。

あの不幸な若者、ニダーデル卿、はメルモットが座った隣の席に着いていた。メルモットが国会議員になってからこういう偶然を三、四度経験していた。若い卿はこの金融業者の娘と結婚したいと強く願っていたので、義父を恥じてはならないと思いつめていた。卿はどこから這いあがって来たかわからない百万長者に、若い貴族として与えることができるこの種の配慮を、結婚にかかわる取引の一部だと理解していた。卿は誠実と勇気の混合という天与の才能に恵まれていたから、考えを実行に移す意思と能力を具えていた。国会の慣例についてちょっとメルモットに教えたり、手に入りそうな金を確実にするためできる限りのことをしたりしていた。ところが、この二日間でもしそうなら、——どうしてこれ以上メルモットに優しくする必要があるだろうか？それに、卿は俗悪かつ不快な人に親切を施す用意はあっても、偽造の罪を犯したと今確信している人にまで丁重な態度を取りたくなかった。とはいえ、メルモットが隣に座ったからといって、すぐ立ちあがって席を移すなどということは気質上できなかつた。卿ははじめさ半分おどけ半分の表情で右隣の人を見たあと、どんな罰であろうと耐える用意をした。

「きょうマリーに会ったかね？」とメルモット。

「いえ。——会っていません」と卿。

「どうして会いに行かないのかね？娘は今いつも君のことを聞きたがっている。私たちは来週自宅に戻りたいと思っている。そうしたら君を心地よく迎えることができるよ」

この男が世間からこぞって偽造で非難されていることを知らないなどという、そんなことがあるだろうか？「事情を教えてください」とニダーデルは言った。「あなたは私の父にもう一度会ったほうがいいと思いますね、メルモットさん」

「何も悪いことがなければいいが」

「ええと。——わかりません。父に会ったほうが早いです。ぼくはこれから議場を出ます。顔を見せるためちよつと立ち寄っただけですから」 卿は外に出るとき、どうしてもメルモットのそばをすり抜けなければならなかった。そうするとき、メルモットは卿の片手をしっかりと握った。「さようなら、私の息子」と、メルモットは大声で——議員があつてう会話で使うよりもずっと大声で——言った。ニダーデイルは当惑して、悲しくなった。しかし、議場にいる人々はみな事情を理解していた。卿は通路を突進し、急ぎ足でドアをいくつか通り抜けた。会見室に逃げ込むと、そこでライオネル・ラプトンに会った。ラプトンはボークラーク氏と少し会話を交わしていたから、さらに情報を手に入れていた。

「何が起こったか知っているかい、ニダーデイル？」

「メルモットのことですか？」

「そう、メルモットのことだよ」と、ラプトンは続けた。「彼は文書偽造の罪でこの半時間前に自宅で逮捕されたよ」 「そうなっていたらと心から願いますね」と、ニダーデイルは答えた。「議場に入つて行つたら、まぎれもなく本人が議場に座っているのがわかります。彼はまるですべてが通常通りでもあるかのように私に話しかけていました」

「コンプトンがほんの少し前にここに来て、ロンドン市長の逮捕状でメルモットが捕らえられたと言っていたがね」

「ロンドン市長は国会議員ですから、みずから犯人を連行したほうが早いですね。とにかく彼は議場にいます。まもなく立ちあがつて演説を始めていても不思議じゃありません」

メルモットは七時までじつと席に座っていた。議場はその時間に九時まで休会に入った。彼は議場を出た最後の

一人で、その後ゆつくりと——ほとんど威厳に満ちた——足取りで食堂へ降りて、ダイナーを注文した。そこには多くの人々がごった返しており、席を見つけるのにちよつと苦勞した。誰からも進んで席を譲ってもらえなかった。それでも、彼は前から座っている不幸な人をほとんど押しつけて、ついに席を確保した。誰かからそこを追い出されることはなかったが、誰かに隣に座られることもなかった。給仕からさえも喜んで給仕してもらえなかった。

——それでも、彼は根気と忍耐でついにダイナーを手に入れた。庶民院議員の正当な権利に基づいてここにいた。どんな根拠によつても、彼が求めるそんなもてなしを拒否されるわけがなかった。まもなく彼はテーブルを独り占めにした。しかし、独り占めにしても、それを屁とも思わなかった。彼は大声で給仕に話しかけ、大いに楽しみながらシャンパンを瓶からついで飲んだ。ニダーデルと親しげに話したあとは、誰からも話しかけられなかったし、話しかけもしなかった。彼を見つめていた人々は、大胆に振る舞うのが彼には愉快なんだと仲間うちで話し合った。——しかし、ほんとうのところ彼はその瞬間おそらくロンドンでもっともみじめな人だった。もし彼が寢床に入つて嘆きと苦悶のうちに夜をすごしたら、今の状態よりもっとよく慰めを見出せただろう。しかし、まわりの世界が今や消え去り、犯された法の怒りが科す極度のみじめさしか目の前に見えなくなつたとき、彼さえもとにかく大胆だという評判を取ることで、最後の自由の瞬間をすごすことができた。オーガスタス・メルモットが死ぬ前に身にトーガ^二をまとつたのはこんな具合にだった。

彼は食堂を出ると喫煙室に入った。そこでいつも持ち歩いている大きなケースをポケットから取り出して、およそ八インチの長さの葉巻に火を点けた。シテイ選出のブラウン氏が部屋にいた。メルモットはほほ笑んでお辞儀をし、ブラウン氏に葉巻を一本差し出した。ブラウン氏は背の低い、丸々と太つた六十すぎの小男だったが、いつも唇をすぼめて眉をひそめることで、いくぶん平凡な顔にもつた印象を添えようと努力していた。ブラウン氏がこの邪悪な金融業者と触れ合うことを嫌つて、あとずさりしたり、あつかましい罪人を見るととき、しかめ面を

二重にしたりするのを見るのは、芝居を見るようにおもしろかった。「おわかりだろうが、先夜私が言ったことをあまり重く見る必要はないよ。侮辱する気はなかったんだ」メルモットはそう言うのと、しわがれた大きな声で笑い、勝ち誇ったように集まっていた人々を見まわした。

彼はそのあと座って、黙ったまま葉巻を吸った。思い出したことが特におもしろいかように、もう一度急に笑い出した。——噂話を信じるなんてまわりの連中はみな馬鹿だと考えて、ずいぶんおかしがっているようだった。それでも、それからはもう誰にも話しかけようとしなかった。九時すぎに彼は再び議場に戻ると、再び前に座っていた席に着いた。このときはすでにシャンパンのほかにブランデーの水割りを三杯飲んでおり、ほとんど何も恐れないうほど気が大きくなっていた。猟獣法に関する議論が進行中で、——この議題に関してメルモットは雇っている女中と同じくらいに無知だった。が、一人の発言者が座ったとき、彼は跳びあがるように立ちあがった。別の紳士も立っていた。議長がその別の紳士に発言を求めたとき、メルモットは譲った。別の紳士にはあまり話すことがなかった。数分もすると、メルモットはまた立ちあがった。その瞬間、庶民院議長の威厳のある胸中によぎった思いを誰が描き出すことができるだろうか？議長はメルモットの悪事について表向き知らないことになっていた。たとえ知っていたとしても、議長はそれに基づいて行動することができなかった。相手は国会議員だった。ほかの議員と同じように口を開く権利を有していた。しかし、そのとき議長は議場を恥辱から救いたいと願っているように見えた。——というのは、議長は二度、三度とウエストミンスター選出議員から「目を合わせられる」のを拒んだからだ。ほかの議員が立ちあがっているあいだは、彼から目を合わせられはしないだろう。ところが、メルモットはしつこくて、無視されまいと意を決していた。ついにほかの誰も話さなくなり、議場は投票することもなく動議を否決しそうになった。——そのとき、メルモットはまた立ちあがった。まだ固執していた。議長は彼をにらみつけると、議長席に深くもたれかかった。メルモットは前の座席に膝を当てて体を支えながら、まっすぐ立ち、みなに

大胆さを見せつけようと決意しているかのように、議場の端から端まで顔をめぐらすと、三十秒間完全に沈黙していた。彼は酔っ払っていた。——とはいえ、たいいの酔っ払いよりも体を安定させることができたし、ふつうならわかる酔いの兆候を顔にまったく表していなかった。ところが、彼は大胆に振る舞う一方で、演説をするには言葉が必要であることをすっかり忘れており、今駆使できる言葉をまったく持ち合わせていなかった。彼は前方によるめて、体を立て直すと、それからもう一度議場を怒りの目で見回し、そのあと前に座っていたビーチャム・ポークラーク氏の肩越しにどうと頭から倒れ込んだ。

彼は自宅にとどまっていたら、おそらくもつとまうトウガを身にまとうことができたかもしれない。とはいえ、我が身を噂の種にすることをただ一つの目的としていたのなら、これより確かな方法はなかっただろう。この場面が演じられたとき、演技者が強制的にどこかわからぬところへ運び去られていたら、まさに記憶に残る場面になっていただろう。議場はかなり騒然となった。ポークラーク氏は生来気立てのいい人だったから、その瞬間はかなり迷惑に思ったものの、平静を取り戻して、急いで酔っ払いを介護した。それでも、メルモットは決して難儀を切り抜ける力を失っていなかった。すばやく立ちあがると、再び席に着き、帽子をかぶり、特別なことは何も起こらなかったかのような顔つきをしようとした。議会はメルモットにそれ以上注意を払うこともなく議事を再開した。酔っ払った議員に取るべき措置について特別な規則がなかったからだ。しかし、ウエストミンスター選出議員はそれ以上迷惑をかけなかった。彼はおそらく十分は席にとどまっていた。それから、あまりしつかりした足取りではなかったが、それでも行く方向を充分わきまえてドアへ進んだ。彼は黙って見つめる人々のなかを退出した。議長と事務官と彼の近くにいた人々にとつて、はらはらさせる瞬間だった。もし彼が倒れたら、誰かが——あるいはむしろ二人、三人が——彼を抱えあげて、運び出していたに違いない。しかし、彼は議場でも、会見室でも、パレス・ヤード三への途中でも倒れなかった。多くの人々から注視されていたけれど、誰からも手を差し出されなかった。門を抜け

て、壁に寄りかかりながら、箱馬車におーいと呼びかけた。彼を待っていた使用人がまもなく彼をブルートン・ストリートトの屋敷へ運んだ。それがイギリス国会が新しいウエストミンスター選出議員を見た最後だった。

メルモットは家に着くとすぐ難なく自分の居間に入り、さらにブランデーの水割りを求めた。十一時と十二時のあいだに使用人が去ると、彼は居間にブランデーの瓶と三、四本のソーダ水と葉巻のケースを携えて取り残された。家のなかの女性は誰も彼のところにやっ来て来なかった。彼も女性たちについて何も言わなかった。そのとき、彼は使用人に懸念を生じさせるほど酔っ払ってもいなかった。夜は習慣的に一人でそこに残った。使用人はいつものように寢床に就いた。ところが、女中は翌朝九時に彼が床の上で死んでいるのを発見した。彼は酔っ払っていたけれど、——夜のうちにおそらくもつと酔っ払っていたのだろうが——、それでも青酸を服毒することで、法が科す不名誉と罰から身を解き放つことができた。

(註)

一 国会議事堂のこと

ニ トーガはローマの男子市民が身に着けた帝国の権威の象徴。

三 ウエストミンスター・ホール(議事堂)とウエストミンスター寺院のあいだの広場(Old Palace Yard)。New Palace Yardはウエストミンスター・ホールの北側にある。